



## 平成29年度中学校武道授業(なぎなた)指導法研究事業

平成29年度中学校武道授業(なぎなた)指導法研究事業(主催=日本武道館、全日本なぎなた連盟、日本武道協議会、後援=スポーツ庁)が1月27・28日の2日間、日本武道館大会議室と小道場で、研究者6名、連盟事務局1名が出席して実施された。

本研究事業は平成24年度から完全実施された中学校武道必修化の充実に向け、なぎなたの特性を踏まえた指導法の研究をするものである。今年度2回目の実施となる今回は、昨年11月に行われた全国なぎなた指導者研修会の振り返りと授業における効果的な指導方法についての検討協議を中心に実施した。

### ■1日目(1月27日)

#### ◇開講式

はじめに今浦千信全日本なぎなた連盟常務理事が挨拶に立ち、「昨年10月に晃華学園で行われた研究事業、翌11月に研修センターで行われた全国なぎなた指導者研修会を踏まえ、今後、学校現場において、いかにしてなぎなたを浸透させていくかについて、しっかり検討していきたいと思います。今回はどのように評価すれば、公平で生徒が楽しく授業に取り組めるかについても研究していきたい」と述べた。



今浦千信 常務理事

続いて、三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶に立ち、「現場で役に立つ指導法を研究し、それを全国指導者研修会で展開していただけるようしっかり研究していただきたい。学校現場で採用されるためには、連盟として各都道府県市区町村や学校に対してアプローチすることも大切になってきます。昨年10月には実際に学校現場に赴き、研究事業を実施いたしましたが、多角的にプランニングしていくことが大事です。これらを繋げていくことにより効果が現れてきます。なぎなたの素晴らしさ、魅力を全国の中学生に提供できるように議論していただきたい。充実した研究事業となることを期待しています」と述べた。



三藤芳生 常任理事

#### ◇検討協議

開講式に続いて、小倉尚美<sup>おぐらなおみ</sup>研究者が日本武道協議会刊行物『中学校武道必修化指導書・DVD』を活用したなぎなた授業の実践例報告を行った。「武道は礼に始まり礼に終わる」ということを押さえた上で、基本的な“体さばき”“打ち”“受け”と段階を踏んで授業を展開している。生徒のなぎなたに対する反応は、楽しい、面白い、もっといろいろなことをやりたい等、肯定的な意見が多い。素足については、武道なので当然という意識があるため、抵抗感はほとん

どない。ただし、体育館の床にはピンやクリップ等が落ちていることもあるので、モップ掛けをしっかりと行い、安全管理には常に気を付けている」。

午後は、高橋登子研究者から11月に行われた全国なぎなた指導者研修会における中学校武道必修化班の報告として、「研修の最後に実施した授業展開発表では、授業運営が大変スムーズにでき、先生方の個性が十分に生かされ、楽しい雰囲気模擬授業を行うことができた。ただし、指示を的確にしないと混乱を生じると思われる場面が見受けられた。外部指導員として参加された方は、技術的には大変優れているが、保健体育科の教員に比べると授業運営能力、安全への配慮等が少し不足している、指導すべきポイントが違うように感じられた」との報告があった。また、吉野喜信よしの よしのぶ日本武道館振興部長からは「全国研修会の目的をしっかりと見据え、参加者のニーズに添った内容を練り上げていただきたい」との助言があった。

引き続き、地域に根差した教育構想として、なぎなたが地域とどのように関わっていったらよいかについて意見交換が行われた。

高橋研究者からは「伊丹市はなぎなたの町と言われている。修武館があるため、子供の頃からなぎなたに慣れ親しんでいる人もいる。また、行政と連携して演武の機会を得て、多くの人の目に触れている。伊丹市内の全中学校が集まって開催される合同体育祭では、各中学校から選抜された160名でなぎなたの演武を披露している。それと、何か行事を実施するときは地元新聞社に連絡し、取材のお願いもしている」。山本由香理研究者からは「香川県・まんのう町でも地域の行事でなぎなたの演武を披露する機会が多いため、なぎなたに興味を持ってくれる生徒が少なからずいる。そういった子をしっかりと育てていくようにしている」との話合いがなされた。

## ■ 2日目 (1月28日)

### ◇ 検討協議

指導書に掲載されている指導案2/10時間目の“側面打ち”の後、八相に構えての“すね打ち”について、実技を交えてDVDの映像を確認しながら検討した。“すね打ち”をする際になぎなたが隣の人にぶつか

ってしまうことについて、「お互いに適正な間合(距離)をとる」「肘をまっすぐに出すことを意識させる」「身幅より刃を出さないように意識させる」等の意見が出た。構える際の手の位置や握り方、高さ等についても細かく検討した。



また、“送り足”“歩み足”“継ぎ足”といった“体さばき”の指導の仕方についても検討した。

小倉研究者から「“継ぎ足”はツーステップの要領で、“トン・ト・トン”のリズムで行うように指導している」と発表があった。他の研究者からは「継ぎ足をリズムで表現するというのは、今まであまりなかった。体育の先生ならではの発想で新鮮だ。ただし、できるだけ飛ばさないような足運びを意識させてほしい」と指摘があがった。

続いて、中学1年生で習う動き、技だけを用いて“リズムなぎなた”の作成方法を研究した。カウント取りから隊形移動、技、発声等を互いに意見を出し合って作成することで、協調性を育む教材として意義があると確認できた。

最後に、今後の課題について「思春期なので発声が不十分、それをどう指導するか」「2年次、3年次の授業展開に向け、リズムなぎなたと試合、それぞれに対応できる具体策を早急に取り入れなければならない」「外部指導員にいかんして授業運営能力をつけてもらうか」「現在の授業採用校は70校程度、これを増やすために連盟としてどう取り組んでいくか、また、様々な要望や質問に対応できる態勢を準備する必要がある」「全国研修会において中学校武道必修化班の参加者に、自分の授業を撮影したビデオを持参してもらい、目的別研修で視聴・情報交換できれば参考になるのでは」等の意見が挙がった。

### ◇ 閉講式

閉講式では、高橋研究者が講評を、今浦千信全日本なぎなた連盟常務理事が主催者挨拶をそれぞれ行い、指導法研究事業の全日程を終了した。